

「平庭の麓から」

文責：久慈市立山形小学校 校長 角谷 隆章

学校+保護者+地域=子どもの健やかな成長

「学び高め合う子」、「心豊かな子」、

「強くたくましい子」の育成をめざして

【2学期スタート！～実りの多い4か月にしましょう！！～】

各ご家庭におかれましては、どのような夏休みを過ごされたでしょうか。今日から約4か月にわたる2学期が始まりました。この間、季節は、夏から秋、そして冬へと移ろいます。長丁場になりますが、ぜひ子どもたち一人ひとりの成長がみられるような実り多い4か月にしたいものですね。

さて、今回は、「昨年」の2学期始業式で私が話したことを紹介します。

みなさん、夏休みはどのように過ごしたでしょうか。1学期の終業式で、校長先生は「夏休みにやとうとしていることがあるはずですよ。それらをしっかりやり切って、満足できる夏休みを送ってください」と話しました。

さて、「しっかりできた」「まあまあできた」「あまりできなかった」の3つのうち、自分がどれにあてはまるか、ちょっと頭の中で考えてください。

では、校長先生の「せーの、ハイ！」で一斉に、「しっかりできた」人はチョキ、「まあまあできた」人はパー、「あまりできなかった人」はグーを挙げます。

「せーの、ハイ！」

さて、今日から2学期です。この2学期は3つの学期のうち一番長い学期です。それだけ自分を伸ばすチャンスがいっぱいあるのが2学期です。さっき、グーを挙げた人も大丈夫。ここからしっかり頑張れば、うんと成長した自分を感じることができます。チョキの人もパーの人もさらに自分を高めるように頑張りたいと思います。2学期は、じっくり取り組み、自分を成長させる学期です。自分のことを自分で見ながら一步一步しっかりと進んでいくことが成長につながります。一人ひとりがしっかりと前に進み、成長できる2学期にしてほしいと思います。

2学期の合言葉は、「元気に登校・笑顔で下校、そして、みんなで前進！」です。みんなで成長し合えるすてきな2学期にしましょうね。

今年も、1学期の終業式で、「やろうとしていることをしっかりやり切って、満足できる夏休みを送ってください」という話はしていますので、ぜひ、今日ご家庭で、チョキか、パーか、グーかを聞いてみてください。そして、2学期の過ごし方を話し合い、励ましの言葉をかけてもらえればありがたいです。

今日の始業式の話は、子どもに直接聞いてみてください。詳しくなくてもいいです。単語一つでも出ればそれでかまいません。話を聞いていたかということを確認できます。何も出てこなくても、怒ったり、叱ったりしないで下さいね。それは、私の話の魅力がなかったということですから……。

【スタンフォードが中高生に教えていること】SB新書 著：星友啓

スタンフォード大学・オンラインハイスクールで校長をしている同氏が書いたものです。序章の『その教

え方が子どもをダメにする『恐ろしい8つの常識』では、これまでの教育の常識を最新科学で一刀両断しています。一つ紹介します。(以下、抜粋)

常識1 「成果や能力をほめる」⇨逆に向上心が下がってしまう

「よくできたね! しかも読むのが早い!」「こんな問題ができるなんて、賢い!」子どもが正しく問題に答えたり、何かうまくできたりした時に、ほめたくするのはごく自然の反応。どんどんほめるのが子どもをサポートする時の成功の秘訣で、ほめれば成功体験を実感させられる。ほめて育てると子どもに自信が付きやる気が上がる。

しかし、実はほめることは「諸刃の剣」なのです。うまく使いこなせば良い効果があるものの、そうでなければ、予期せぬ逆効果で子どもに悪影響を与えてしまいます。例えば、冒頭のように、「よくできた!」「こんな問題ができる!」などとして、子どもの成果そのものをほめたり、「読むのが早い!」「賢い!」などと、子どもの現在の能力や知性をほめることは、非常に危険です。

この点について、キャロル・ドゥエック教授の一連の研究が有名です。ドゥエック教授らは、ある研究で、小学生を2つのグループに分けてパズルを課しました。どの生徒もすっかり取り組みれば大方はできる程度の易いものです。パズルが終わった後、一方のグループ(知性グループ)には、できたパズルの数(X)を伝えて、「Xもできてる。よくできたね! 頭いいね!」などと言って、成果をほめる言葉をかけます。もう一方のグループ(努力グループ)には、「Xできてるね。すごくよく頑張って考えたね」と努力をほめる言葉をかけます。その後、それぞれのグループには、パズルが楽しかったか、持って帰ってもっとやりたいか、今後もいい結果を残す自信があるかなどの質問をします。「楽しさ」「やる気」「自信」のチェックです。このチェックの結果、2つのグループで有意な違いは見られませんでした。しかし、もう一度パズルをやるとしたら、より難しいものをやりたいか、それとも、同じようなものをやりたいかを聞くと、2つのグループで大きな差が出てきます。知性グループは、大半が同じようなものがやりたいと言ったのに対し、努力グループの90%がもっと難しいものをやりたいがったのです。知性グループは「賢い」とほめられたため、パズルの結果で自分が評価されることを体感し、同様の成果を残して「賢い」と見続けられようとした一方、努力グループは努力がほめられたので、さらに努力を続けようとしたのです。

正しくほめるための秘訣

この実験には続きがあります。第2ラウンドとして、同じ子どもたちに1回目のパズルよりも難しいものが渡されます。その結果、ほとんどの生徒が1回目のパズルよりも、成績が悪くなります。それが終わった後に、子ども達に1回目と同様の「楽しさ」「やる気」「自信」に関する質問をします。ここで、知性グループと努力グループに大きな差が出てくるのです。

知性グループは、今回の問題を前回よりも楽しむことができず、持って帰ってやる気も出ず、また、前回よりも低いパズルの成績に自信も落ちてしまいました。自分が得た「賢い」というラベルが傷つけられ、楽しさややる気、自信まで削がれてしまったのです。一方、努力グループでは、前回よりもパズルを楽しく感じ、家に持って帰ってやる気も上がり、また、前回よりもできなかったにもかかわらず、そのことが自信の低下にはつながらなかったのです。

この実験から分かるように、成果や知性をほめしまうと、自信ややる気が増すどころか、まったく逆の方向に向いてまいかねないのです。ほめる時は成果や知性をほめるのではなく、子どもの努力や積極的に学ぶ姿勢をほめましょう。そのことで、子どもの持続的なやる気を育むことができるのです。

本書のなかみがすべて正しいかどうかはさておき、少なくとも、ほめ方に、‘コツ’があるというのはその通りなのかと思います。最後の3行がポイントになるでしょうか。1学期、本校職員にも紹介したのですが、ご家庭でも参考になると思い、掲載しました。いずれ、『子どもの成長のためには……』という視点は常に持っておきたいところですね。